

勝海舟中

子母澤寛全集 七

編集委員 司馬遼太郎 尾崎秀樹

滕海舟 中

講談社

子母澤寛全集 7



勝海舟(中)

昭和四十八年四月二十四日 第一刷発行
昭和四十八年十二月十日 第五刷発行

著者 子母澤寛

装幀者 辻村益朗

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽二―十二―二十一 郵便番号 一―二

電話 東京(〇三)(945) 三二 大代表 振替 東京三九三〇

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 藤沢製本株式会社

一二〇〇円

落丁本・乱丁本はおとりかえ致します

© 梅谷龍一 1973

0393-251576-2253 (0) (全)

子母澤寬全集第七卷

目次

第三卷 長州征伐

霧深し	二
うれいきたつてたれどもにかたらん	
憂来共誰語	三
初鰯	三
甲子春	四
落椿	五
淀川夜船	五
夕焼	六
焰	七

秋の水……………九八

江戸音信……………一〇九

巨木……………一一〇

曇り日……………一二一

栄辱不関……………一四三

独り眠らず……………一五三

睨む目……………一六三

顔……………一七四

群雀……………一八六

遅れ咲	一九六
道芝	二〇四
冬雨	二一八
寅年	二三九
雲の峯	二四一
漠々濛々 ばくばくもうもう	二五一
憂深き者	二六三
男の道	二七三
空蟬衣	二八五

秋色……………二九五

不如歸ほととぎす……………三〇六

雁來紅はけいとう……………三二七

第四卷 大政奉還

時雨月……………三八

冬來りて……………三九

初霜……………三五〇

海律全書……………三六一

蛙かえるこの子……………三七三

雪……………三八二

闇……………三九三

風立つ……………四〇四

遠鳴……………四一五

波……………四二四

万里……………四三四

半年紅……………四四四

桐秋……………四五四

暁 あかつき 四六四

一塵一劫 四七三

転又変 四八三

凧 こがらし 四九三

非心力所及 五〇三

紛々擾々 五一三

欠堤 五二二

花尊者 五三二

梅 五四二

鳶輪を描く	五三
獲物	五三
胆っ玉	五七
或説己身	五八〇
解説・尾崎秀樹	五九
付 勝海舟関係写真Ⅱ 写真・榊原和夫	
・ 中谷吉隆	

勝
海
舟
(中)

第三卷 長州征伐

霧 深 し

この頃麟太郎は、なにかにつけて怒ってばかりいる。

おたみは、若い時分から、主人の癩癩かかしには馴れっことで、なんと難題をいわれても、にこにこしているが、お順が、ときどきそれに逆らっては、却ってみんなを、はらはらせる。その度にお順さん、黙っていらっしやいまし、旦那様も外へ出ては苦しいお勤め故、せめて内で勝手放題をなさらなくてはお氣が詰って困りましょう、おたみがそういった。

麟太郎のむかむかするの尤でもある。幕府の遣口は日一日と因循姑息で、にっちもさっちも行かなくなると、閣老も若年寄も、奉行も、病氣といつて引籠って終う、その度に、外に対しても内に対しても、信義を失って行くだけだ。

すでに償金を払った生麦事件が、今度は薩摩と英吉利との戦になった。これも幕府の失敗だ。第一薩摩と英吉利と

の直接交渉にするなんぞはべら棒な話、如何に大きくても薩州は幕府治下の単なる一藩、日本を代表する幕府が一切解決をしなくてどうなるのだ。幕府の腹では、英吉利と戦をさせて、雄藩薩摩の力をそぐつもりだが、その代り、幕府は日本を代表するものではないと、自分で声明したと同じ。麟太郎は、

「馬鹿の底が知れねえわ」

お城から帰って来て、その晩は食事もせずに寝て終った。

次の日、杉がやって来て、これをきくと、

「幕府は思う壺で喜んでいるでしょう」

と笑った。麟太郎は、しかし、戦というものは、勝ったにせよ、敗けたにせよ、それで自分の力というものがはっきりわかる。だから、それから一年後、十年後のその国の力は、百倍にも千倍にも飛上るものだ。今、薩州がやられて喜んでいる、五年後、いや三年後を御覧よ、薩州、長州は幕府なんぞの手におえなくなる、そんな時になって泡を喰らったって、もう遅いよ、ましてや薩州は充分用意をしてかかっただけに決して敗けてはいねえわき、軍服のままの英吉利の士官の死骸が渚に打揚った、こ奴あ薩州の敗けてねえ証拠だよ、といって、

「それにしても杉、薩州では、百名位の決死隊が、八隻の小舟に分乗して商人風を装って英艦に近づき、隙を見て飛込んで、乱撃するつもりで出かけたとうよう、英吉利にも油断なく、これは失敗に終わったらしいが、え、旗本にそんな

のあいるかえ」

「しかし、元寇じゃあるまいし遣口が泥っぽくて幼稚ですわね」

「遣口じゃあねえ、そんな胆の奴がいるかという事だ、胆せえあれあ、策は自ら機に臨んでどうにもなる、こ奴の問題だ」

麟太郎は腹を叩いた。

「こんな時を、こっちはいつもいつも空論ばかりよ。戦争の事なんぞ、長々いろいろ評議をしたとてどうなるんだ、今といたら今直ぐに立つ、要は簡単だ、上下唯死を覚悟していればそれでいいのだ。それになんてえ、きのうも、営中で防禦の議上、おいらの事を、勝は暴論ばかり吐くといった奴がある」

麟太郎は、この八月のはじめから、海陸御衛御用取扱を命じられていた。御家柄で、弟子の木下謹吾も同役だ。

*

「馬鹿共がいつもいつも深慮遠謀といつては、敗ける事ばかり考へてゐるわさ、網を張ってそ奴へ魚を引っかけようとする、が、海は広いよ、魚はその網の上を行く、下をくぐる、こっちの注文通りには行ってくれねえ、その行かない注文ばかりを頼むのさ。昨日は、謹吾と二人、顔を見合せて思わず大声で笑ったら、目付の杉浦正一郎が怒ったよ、おいら云ってやったんだ、そんな相談なら、したって、しなくたって同じだとね」

「相変らずですわね」

と杉は、どうも長崎で修行すると人間の鼻っ柱が強くなると見える、ごて屋の松本良順がとうとう西洋医学所頭取になるような噂ですよ、しかし啖呵は氣に入りました、西洋たあなんだ、医学だろうがなんだろうが、学問がこっちの身につけあ、もうこっちのもののだ、西洋と冠をつける事はない、医学所だけで結構だといつてるそうですよ。

「当り前だ。緒方洪庵亡き今日、先ず医学はあ奴だね。それに伊東玄朴と不仲で喧嘩をしている噂は、おいらも聞いていたが」

「それあそうでしょう、まるで肌合が違いますよ、玄朴は実に要領のいい奴だ、あ奴の話上手には、わたしも舌を巻いた事があります」

早い話ですが、浄瑠璃坂の丹鶴書院で、あ奴が主人の水野土佐守と話しているのを隣室で洩聞いた事がある、言葉の応対振りが如何にも巧妙で、学者でもなし、武家でもなし、一体何者だろうと、ほとほと感心して、後で聞いたたら玄朴だという、道理こそ思いましたな。

「良順はぶつきら棒よ。あ奴あ豪傑だ、金儲けのうまい玄朴たあ違うさ」

「良順は西洋医学所の攻撃をまるで仕事にしていた。医学は日新又日新の学だ、然るに医学所の教授するところは総て旧学陳腐、今日の実用には適さないと、一々例証を以て論説するので、流石の洪庵先生も弱っていたそうですわね」

「玄朴も事毎にやつつけられていたようだから、近々には奥詰典医を罷めるだろう」

丁度その日そこへ、木下謹吾がやって来た。表向きは同役だが、ここでは昔ながらの弟子師匠だ。

「お聞きになりましたか松平備後守の一件を」

「なんだそれあ、松平備後守ってのあ歩兵御頭じゃあねえか」

「そうです、それが、ある閣老の推挙で軍艦奉行になるという」

「うーむ。それがどうしたえ」

「なるのはいいんですが、何処から洩れきいたかみんなが納まらない」

「納まらねえと」

「頭取では小野友五郎、それに病気でねている伴鉄太郎、悉く辞表を出して来ましたが、元より、わたしも出します」

「うむ」

「取調役組頭では——」

と云いかけた時に、お糸が、次の間の廊下から、

「吉岡様がお見えでございます」
といった。

*

ほうら来た張本人がよ、麟太郎は、木下を見て、にやにや笑った。真実、おかしくって、海軍の海の字もわからねえ備後守の下になんぞつけるか、と云い出したのは御軍艦操練所取調役組頭筆頭の吉岡勇平だ。木下もそれは知っているから、思わず、ぷっと吹出した。

吉岡は相変らず、元気のいい調子で入って来た。白麻を

着ていた。この吉岡が、まだ挨拶をしないのに麟太郎は、御機嫌ようと云いてえが、不機嫌らしいねえ、と云った。木下が来ている上は、万事がわかっていると思ったのだから吉岡は、むかむかしますよ、と云いながら、

「わたしは、海軍は海軍として、がっちり固めて行く、外からは指一本ささせないというのが本当だと思います」

それに、なにか政治的の力が動いて、これ迄海軍には縁もゆかりもない、従って少しも海軍を知らない人間などが枢要なところへ坐られては、旧弊忽ち興って、実に由々しき大事だと思ひます、海軍には海軍独自の立場があり、機密があり、方針がある、その進路に些かの邪魔をされても、まだ發展途上にある海軍として、否、日本国将来のためにも、この上の不為は無いではないでしょうか。このわれわれの赤誠は当然認められなくてはならぬ筈だ。先生の御意見は——吉岡は例によって、生一本だけにむきになっている。

麟太郎は、まあまあ、となだめるような顔つきで

「そ奴に軍艦をあずけてやらせて見れあいじゃあねえかえ」

「今、そんな呑気な事を云われては困ります、海軍は、閣老の力も若年寄の力も利かぬところだという事を、先以てはっきり見せなくては、神国千万年の患になりますから」
「いいよ、あ奴らにやらせて見るが一番だよ、一度で手を焼く、こっちで頼んでも二度とあちらから手は出さなくなるわさ」

「生^{なま}温い生温い、先生、それでは生温い」

「そうかねえ、木村先生の御意見は、え」

「摂津守様は、ああしたお方ですから、まだ何事も申上げない」

「おいらにだけ片棒担がせるかえ、お前さんきつと、叱られるよ」

麟太郎は、言葉の上では反対らしくも見えるが、腹の中では、やれやれと煽り立てているようなものを、吉岡は感じていた。

吉岡は、夜になってから帰って行った。決して話を真面目にはせずいつも白々とぼけてはいるが、勝という人間の正体を知っているだけに、吉岡は、自分と反対の科^{せう}白^{はく}をきかされながらも、なんとなく、胸のつかえが下ったような心地がしていた。

西へ坂を下って、新町つづきの赤坂御馬場へ出ようとしたところで吉岡は、ふと立停った。向うから、聞知った声が交って、宵闇の中を五六人やって来る。一人の白い着物が目立って見える。

*

「柴田さん、柴田さん」

吉岡から声をかけた。同じ組頭の柴田隼^{はや}太郎が真っ先きで、小林甚六郎、石川壮次郎、それに取調役の桜井貞蔵、高橋震太郎がいる。

「おっ、吉岡さんだ」

と柴田はそういって、みんなで屋敷へ行ったら、勝先生の

ところらしいときいたから、こっちへ廻って来たところだ、取調役十五人の中大岩啓之助がただ一人、辞表に不服だが、他は何れも賛成で、こ奴をふところに、膝詰めにしやろうと、松平備後守の屋敷へやって行ったが居留守を使って逢わない、押切って上り込むのも如何だし、屋敷中がひどく狼狽^{ろうたい}揺の様子だから、充分薬の利き目はあったと思う、ところで勝先生の意見はどうだえ。

「いつもの通り、空っぽけて勝手をいっているが、なんでもいいものか」

「じゃあ、明日は、操練所頭取まで辞表を纏めて差出して置いて、様子を見るか」

「まあ、そんなところだ、それでいかなうなら、次の策^てだよ」

操練所頭取は、これ迄の御船手頭向井将監^{しょうげん}が船手方の廃止に伴って、当役に当たっていた、小十人頭の格だが、二千四百石いただいている。

丁度その頃、麟太郎のところには、大阪の佐藤与之助から長い手紙がついて、杉と二人で、話しながら見ていた。

宗対馬守が、幕府へ頼んで昌光丸を拝借してそれで帰国したが、颯風^{さつぷう}に逢って大破損をし、三人も死人が出来た、鈴木録之助氏は、船と巖との間に挟まれて死んだ、このような事はひいては海軍隆盛に影響があると思うと気がかりだという事や、勝の關係ある各地の砲台築造のその後の経過、それから、神戸の塾へ、長藩有志五十余人余が、勅命を軽んじ、あまつさえ兵を率いて上洛した大逆臣小笠原圖書